

6 歯・口腔の健康

<鳥取県の目標>

80歳になっても20歯以上の歯を保ち（8020運動※）、生涯自分の歯でおいしく食べよう

<鳥取県の目指す方向性>

- 歯科健診（検診）受診率向上による歯周病予防の強化と罹患者の減少
- 乳幼児期及び学齢期のむし歯の更なる減少と学齢期からの歯肉炎予防
- 乳幼児期から高齢期までの口腔機能の獲得、維持、向上（80歳で20歯以上の歯を保つ）

※8020運動：「80歳になっても20本以上自分の歯を保とう」という運動

<具体的な数値指標>

項目		平成24年 (調査年(度))		平成29年 (調査(度))		平成35年 目標値
①自分の歯を有する者の割合	80歳代で20歯以上	30.8%	H22	35.1%	H28	40%
	60歳代で24歯以上	56.1%		61.2%		70%
	40歳代で喪失歯のない者	62.2%		60.3%		70%
②フッ化物洗口に取り組む施設数 (4歳～14歳まで)	就学前 (保育所、幼稚園、認定こども園)	70施設	H22	116/214 施設	H28	133施設
	就学後 (小学校、中学校、特別支援学校)			7/203 施設		17施設

(出典)①県民歯科疾患実態調査、②健康政策課調べ

歯・口腔の健康は食べる喜び、話す楽しみを保つ上で重要であり、身体的な健康のみならず社会的な健康や生活の質の向上にも大きく寄与します。

以下の点に注意しましょう。

(1) 口腔機能を維持することは、健康寿命の延伸や生活の質の向上に繋がります！

口腔機能は、日常生活を営むために不可欠な摂食と構音機能と密接に関連するものであり、その機能低下は寿命の延伸や生活の質の向上に多面的に影響しています。

特に、高齢者における咀嚼機能の低下は、かめない食品の増加につながり野菜摂取量の減少等、栄養の偏りを招く要因になります。このことから口腔機能の低下は、虚弱高齢者や要介護高齢者では低栄養を招くリスク要因のひとつとなり、生命予後にも大きな影響を与えます。

このように生涯を通じて健やかな日常生活を送る上で、口腔機能は大きな役割を果たしており、乳幼児期から口腔機能の獲得、発達を支援していくことが大切です。

また、むし歯による歯の喪失は、口腔機能に大きく影響するため、乳幼児期から学齢期を通じて継続したむし歯予防は非常に大切です。

(2) 定期的に歯科健診（検診）を受け、歯周病を予防しよう！

歯周病は、歯の喪失をもたらす主要な原因疾患です。歯周病のはじまりの歯肉炎は学齢期から増加傾向にあるため、正しい歯口清掃を行うことが大切です。

また、歯周病と糖尿病、循環器疾患、早産などとの関連性について指摘されていることから、歯周病と全身の健康の関係に効果的な予防対策が必要となっています。そのために定期的な歯科健診（検診）による継続的な口腔管理を行うことが、歯・口腔の健康のみならず生活習慣病の予防において重要な役割を果たします。

かかりつけ歯科医のもとで定期的に歯科健診（検診）を受診し、歯石除去や歯面清掃などの口腔管理を受けることも重要です。

1 現状と課題

- 幼児期のむし歯罹患率は減少傾向にあるものの、改善の余地があり対策が必要です。
- 20歳代における歯肉炎を有する者の割合が悪化しています。
- 40～60歳代における進行した歯周炎に罹患している者の割合が悪化しています。
- 30～50歳代における歯間清掃器具を使用している者の割合はまだ低い。
- 60歳代における口腔機能・維持向上においては、横ばい状態です。
- 高校生の歯周病を有する者の割合は、悪化傾向にあります。

2 今後の施策の方向性

<重点事項>

○ライフステージ別に応じた取組

- ・ 乳幼児期：フッ化物洗口法等による乳幼児期からのむし歯予防の推進
- ・ 学 齢 期：フッ化物洗口など学校における歯・口の健康づくり（学校歯科保健）の推進
- ・ 成 人 期：歯科疾患の早期発見のため、歯科健診（検診）受診率向上のための支援（職域・地域における歯周病予防対策の推進）
- ・ 高 齢 期：口腔機能向上に関する普及啓発や取組の推進

○生涯にわたる取組

- ・ むし歯予防におけるフッ化物応用の有効性についての啓発推進
- ・ 歯の喪失防止のためのむし歯及び歯周病予防対策の推進（8020運動の推進）
- ・ 歯科疾患の予防と早期発見・早期治療のため、歯科健診（検診）受診率向上の支援

<その他の事項>

- 食育や介護予防との連携により、口腔機能を維持、向上する取組の推進
- 生活習慣病予防として、歯科と医科の連携により、全身と歯科の関連の深い疾患（糖尿病、心疾患、脳卒中、早産、誤嚥性肺炎等）との一体となった取組の推進
- スポーツ外傷等による歯の破折予防に向けた普及・啓発

【その他の参考データ】

項目		平成 24 年 (調査年(度))		平成 29 年 (調査年(度))	
①60歳代における咀嚼良好者の割合		62.1%	H22	64.4%	H28
②むし歯のない子どもの割合	1歳6ヶ月児	97.2%	H21	98.9%	H27
	3歳児	78.5%		86.0%	
③12歳児における1人平均う歯数(DMFT指数)		1.2 歯	H22	1.2 歯	H28
④歯周病を有する者の割合	中学生	7.2%	H21	4.6%	H28
	高校生	3.2%		5.3%	
	歯肉に炎症所見を有する者(20歳代)	56.7%	H22	65.8%	
	進行した歯周炎を有する者(40歳代)	26.9%		31.1%	
	〃 (50歳代)	40.0%		37.3%	
〃 (60歳代)	45.2%	50.3%			
⑤歯科用補助清掃器具(歯ブラシ以外)を使用している者の割合(30～50歳代)		47.0%	H22	49.7%	H28
⑥定期的な歯科健診(検診)、フッ素塗布、保護者に対する歯科保健教育を実施する市町村数(法定外のもの)		13市町村	H21	12市町村	H27
⑦過去1年間に歯科健診(検診)を受診した者の割合		-	-	43.4%	H28
⑧成人歯科健診(検診)を実施する市町村数		8市町村	H22	7市町村	H27
⑨歯科健診(検診)を実施する事業所数		51ヶ所	H22	6ヶ所	H27

(出典)①④⑤⑦県民歯科疾患実態調査、②1歳6ヶ月児・3歳児健康診査、③④学校保健統計調査、
⑥⑧健康政策課調べ、⑨鳥取県歯科医師会調べ